

正  
地方落穂集

一  
二

73
6763
1





門 73  
號 6763  
卷 1

明治三年庚午九月

校 正  
地 方 落 穂 集

東京

晚翠書屋藏版



校正 地方落穂集弁言

夫地方を聖人の法よりて井田を以て本と爲し、法者君  
臣民名分定まり、より、以て文武両道を重んじ、文官を  
内職治る、武官以外を司る、是を深き家二千口、武家十  
口と分下し、凡て田家の法を行ひ、耒耨而收の務を勵  
まし、其餘を貯へ、飢饉無窮の料と爲り、孫ふそむる  
民をへり、耕墾を以て業とせり、其有餘より出さず、  
百姓とす、その城以て耕墾を學ぶ、民をさし、て百姓と  
稱す、今國を小くす、移すものか、其法皆由緒正しき  
末代あり、まこと百姓の内より士と出、工高を多け

校正 地方落穂集

序



都て農工商の肉へ士と強ての民と凡人と  
食住の二を離るる所、其間を以て第一とす、既  
百姓を農を勤め外、民と云ふ、其の言及、機、織、家、  
民屋、あやとり、用、所、の、竹、木、草、繩、糸、或、は、金、銀、銅、鐵、  
錫、鉛、系、綿、織、物、麻、布、木、炭、葉、茶、漢、唐、都、て、土、地、を  
生、ま、す、の、山、野、海、川、の、產、物、も、亦、は、地、方、の、產、物、也、一、定、く、農  
民、の、手、より、出、し、自、餘、の、三、民、是、を、以、て、各、各、業、を、勤、む、  
百、姓、を、第、一、代、り、め、り、て、天、下、は、根、本、な、り、され、ば、百、姓、の、二  
字、を、治、室、と、訓、ま、せ、ま、す、每、士、と、三、民、を、結、ぶ、て、之、を、平、治、  
也、と、い、ふ、安、全、な、り、一、む、す、功、三、民、の、冠、と、り、定、を、以、て、士、農

工商の隙あり、士を以て治る、民を以て治る、賦税徭役を  
重くし、百姓を治る、時を、作物實の、以、て、年、を、海、内、  
一、多、田、畑、桑、野、と、ある、種、と、ま、す、と、何、を、以、て、國、家、を、治、め、  
む、治、め、不、く、財、聚、則、民、散、財、散、則、民、聚、と、い、ふ、所、を、これ、を  
民、省、一、時、を、天、下、福、ある、は、唯、正、税、を、納、め、て、民、を、以、て、苦、  
む、事、を、な、く、民、の、戸、牖、の、耕、作、の、力、是、り、五、穀、常、饒、り、  
て、上、も、是、あ、り、下、も、民、福、を、得、る、所、を、四海、平、安、な、り、之、を、先  
實、と、い、ふ、凡、地、方、の、產、物、を、蕩、と、し、て、極、り、あ、り、今、此、書、を  
信、方、分、の、一、二、を、以、て、之、を、記、し、定、不、大、回、の、後、種、を、拾、  
ひ、の、あ、り、一、題、一、て、落、穂、集、と、い、ふ、就、ま、す、も、此、書、を、熟、讀、

東正地



滋味して甘之所を得る不即りくも、豈國郡を治るの由  
小庶幾くんと云爾

明治庚午晩春之吉

烏有逸人後

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

校正地方落穂集

一 總目錄

卷之一

- 一 地方六の法發り并地方名目の事
- 一 井田古法の事并圖式附愚案
- 一 田籍の事
- 一 國分の事
- 一 五畿七道定りし事
- 一 五畿の事
- 一 七道の事
- 一 郡郷邑里村巷定りし事
- 一 國郡庄郷里の事
- 一 村里并田方百石地割の事
- 一 田畑及別制作の事



- 一 賦稅徭役の事
- 一 耕作制の事
- 一 土民辨別の事
- 一 大閤檢地歩數の事
- 一 同 五六の數の事
- 一 町割の事
- 一 境の地ニ炭と埋る事
- 一 關東關西の事
- 一 所領の事
- 一 村里田畑開闢の事
- 一 同 善惡と知る事
- 一 土の善惡と知る事
- 一 土地見様の事
- 一 村柄の事

卷之二

- 一 古料の發り并京料ニ直に發すの事
- 一 斗燈太の事
- 一 金銀兩目積發りの事
- 一 鑊錢の意味并九六目枚の事
- 一 金一分と百匹と云事
- 一 田地永代賣停止發りの事
- 一 石盛斗出しの事
- 一 田畑六分違ひ一五の法發りの事
- 一 關東二石五斗替の事
- 一 同 厘付の事
- 一 厘付の法ハの數發りの事
- 一 廿貫百石と云事并永の四割替高二割替と云事
- 一 上方厘付并三分一銀納の事



- 一 上方銀納直段関東直段と二割高の事
  - 一 上方関東又取釣合の事
  - 一 永の四割替高の二割替高の五石替再談の事
  - 一 田畑六分違厘付又取勘辨の事
  - 一 山野海川高又結ぶ法の事
  - 一 浮役小物成臨時物の事
  - 一 高の五石替考の事
  - 一 山方一毛作の場所高に結ぶ勘辨の事
  - 一 旱損水損干減立方の事
  - 一 糶摺取分勘辨の事
- 卷之三
- 一 海石と云事
  - 一 十箇年平均と石盛根取仕出しの事
  - 一 右早実の事

- 一 田畑六分違直段の事
  - 一 高と厘とと見て物成米金を知る事
  - 一 上方と仙臺知行騎馬物成一倍違の事
  - 一 田畑検見一件の事
  - 一 小検見の事
  - 一 立毛坪刈の事
  - 一 坪糶着法の事
  - 一 取米仕出しの事
  - 一 當合仕出しの事
  - 一 奥州伊達信夫郡方今岩代堂出しの事
  - 一 畝引仕出しの事
  - 一 大検見心得の事
- 卷之四
- 一 當時検見の事



- 一 五分取の法七五發の事
- 一 四叔の法發りの事
- 一 高一石の地坪と得る事
- 一 同 地坪と合毛して厘と仕出を事
- 一 當合より石盛と仕出を事
- 一 定免の事
- 一 平均を見て破免を知る事
- 一 永引起返し吟味心得の事
- 一 見取場并取下場吟味心得の事
- 一 古新田吟味心得の事
- 一 川欠水堀地所改方の事
- 一 木綿作檢見の事
- 一 木綿一坪の當合毛仕出しの事
- 一 分米高辻と云事

- 一 知行渡し分郷の事
- 一 越石百姓の事
- 一 私領渡し村五ヶ年平均心得の事
- 一 私領渡し節新田込高の事
- 一 四公六民法の事

卷之五

- 一 本石斗立の事
- 一 延米の事
- 一 込米の事
- 一 奥州白川領方吟磐城屬を半石直段高直に成意呆の事
- 一 田畑物成心得の事
- 一 同 取下反取付様心得の事
- 一 野山開發損益の事
- 一 甲州大切小切の事并小切發の畧傳



- 一 甲州郡内領雜穀直段仕出しの事
  - 一 同領石間引の事
  - 一 鎌倉永別の事附八幡神領小作年貢の外公納の事
  - 一 奥州方今磐城岩代陸前陸中陸奥の五ヶ國は割割を四一高并七百文替出目永の事
  - 一 四六出目の事
  - 一 宿六高掛金荏大豆餅米納の事
  - 一 道中宿次心得の事
- 卷之六
- 一 反高の事
  - 一 込高の事
  - 一 延高の事
  - 一 色高の事
  - 一 無地高の事
  - 一 知行渡し口米永の事

- 一 口米永の事
- 一 代官諸入用積り定の事
- 一 役儀命せしめし節扶持方持高より増減の事
- 一 代官所の外用向相勤し節入用と給はる定の事
- 一 手代檢使入用定の事
- 一 廻米破船見分手代入用定の事
- 一 諸役人定式の外勤方は付廻禮の事
- 一 代官參府謁見の事
- 一 役料返納の事
- 一 返納米の事
- 一 兼物断り状の事
- 一 代官皆済届の事
- 一 代官引越の節関所通手形一件の事
- 一 諸國関所名目并通り筋の事



- 一 女通手形出所の事
- 一 鐵炮改一件の事
- 一 拜領屋敷受取の節式法の事
- 一 知行渡再診の事

卷之七

- 一 古来檢地條目の事
- 一 享保十一年觸達新田檢地條目の事
- 一 新田開發願に付初發吟味心得の事
- 一 掛り代官新田場所見分の事
- 一 檢地役人の事
- 一 誓詞文言并罰文認方故實の事
- 一 檢地致し方の事
- 一 同 竿入方の事
- 一 山畑竿入心得の事

- 一 大場の檢地竿より大事有事
- 一 田畑境目植物の事
- 一 同 位付の事
- 一 同 高よ結ぶ事

卷之八

- 一 廻米積船定書の事
- 一 同 船頭水主炊等へ申渡しの趣并請書の事
- 一 同 上糸請書の事
- 一 同 船中日記前文言の事
- 一 同 沓城米浦觸の事
- 一 同 送り状の事
- 一 廻米出船注進書認方の事
- 一 同 船賃渡せし後異變有之船定法の事
- 一 同 濡澤手船頭辨米の事



- 一 廻船請負人敷金の事
- 一 破船有之節書上の事
- 一 浅草市蔵より換出俵澤手等拂米の事
- 一 同 市蔵番敷の事
- 一 手本米箱仕立様の事
- 一 所々河岸にこもり浅草市蔵迄運賃の事
- 一 五里外駄賃の事
- 一 海船河舟打替の事
- 一 海船流荷物沈荷物取上定法の事
- 一 河船流荷物の事
- 一 江戸方今東京より改る八丈島迄海上里数の事
- 一 豆州島々善惡の事
- 一 島寺代相止し事

卷之九

- 一 評定所發端年歴の事
- 一 同 首板定書の事
- 一 田畑永代賣仕置の事
- 一 公事方勝手方公用日并刻限の事
- 一 徳川將軍家精進日の事
- 一 紀州家代々忌日の事
- 一 前々仕置筋の事
- 一 宍罪除日の事
- 一 追放輕重の事
- 一 過料の事
- 一 差紙不承の事
- 一 亂心して人を殺せし者の事
- 一 追放百姓跡式の事
- 一 酒狂して人を手負せし者の事



一酒狂しく人と打擲せし者の事  
 一同 諸道具を損せし者の事  
 一同 自分と疵付し者の事  
 一仕置者先達て拜借物の事  
 一百姓持社の事  
 一評定所出役手代扶持方の事  
 一村方又落者跡式の事  
 一所拂の者跡式の事  
 一倒せ者或散見分心得の事  
 一手負人見分心得の事  
 一手負取扱ひ忌べき品の事  
 卷之十  
 一鯨分一定法の事  
 一流鯨の節注進書の事

一鯨見分は罷越と手代吟味心得の事  
 一同 落札金高勘定所へ書上の事  
 一同 十分一取立残金村方へ給りる同書の事  
 一金山問屋運上割の事  
 一檢地以後取箇付様の事  
 一私領と入組し公用の節書上心得の事  
 一直參の名殿付の事  
 一諸納米金伺の儀より付定書の事  
 一穢多煙止納米金の事  
 一巢鷹山取計ひ心得の事  
 一百姓割合物より付申渡されし品の事  
 一無地高類辨高の事  
 一讓鐵炮并舟積鐵炮の事  
 一傳馬町へ人馬申遣を次第の事

文正地方各集 卷之一 終目



- 一品川附出荷物貫目定物の事
- 一巾林伐出し場所繪図の事
- 一山の木立見様の事
- 一立木根伐の事
- 一拙取の事
- 一文物の事
- 一大木見分の事
- 一根伐せし木軽重取計方の事
- 一渡場出川下の事
- 一大木水上衆方の事
- 一材木才詰心得の事
- 一鐵物の事

卷之十一

一論所地押申付らせし手代勘定呼出の事并請書の事

- 一附内寄合より申渡は相成る諸書物請取認方の事
- 一在當地より初發双方より取る證文の事
- 一掛り奉行へ伺ふべき品の事
- 一論所着の節早速取るべき證文の事
- 一宿より取るべき證文の事
- 一双方論人共へ申渡を書付の事
- 一吟味の節罷出し人数前書の事
- 一見分吟味相消を双方より取るべき證文の事
- 一木錢飯米代請取書付認方の事
- 一論所手入内じき旨證文の事
- 一在當地へ罷出る日限申渡を双方證文の事
- 一論人共出府の節取るべき證文の事
- 一掛り奉行へ書物差出を目錄の事
- 一双方より前方差出せし書付返を節取るべき書付の事



- 一 刑裁許治之評定所納書物入箱表書認方の事
- 一 代官より差出に取着届の事
- 一 論所用の付心得へき品の事

卷之十二

- 一 大切の囚人と江戸へ召連る事
- 一 囚人召連し役人先觸并江戸着心得の事
- 一 大切の囚人手鎖掛様の事
- 一 當人吟味心得の事
- 一 手負死人見分の節嗅氣と受ぶる仕方の事
- 一 大切の料人病死の節塩詰仕方の事
- 一 遠方へ遣は獄門首持様の事
- 一 手負其外寢死の者取置の事
- 一 首盜見分心得の事
- 一 人と殺し立退し者の事

- 一 百姓出入内濟の付濟口証文の事
- 一 内府致し善と惡と有事
- 一 牢舎申付らせし者と牢屋へ連行手代心得の事
- 一 道中筋倒を者寢死の者小届の事
- 一 傳馬宿出火の節心得の事
- 一 在方出火注進心得の事
- 一 欠落せし奉公人先くつて惡事仕出せし節の事
- 一 盜賊せし者仕置の品ある事
- 一 料所私領出入の付料所百姓奉行所へ出し節の事
- 一 仕置者有之節心得の事
- 一 拷問の事
- 一 誤證文以来相成ゆる事
- 一 社寺の面々取計心得の事

卷之十三



- 一 轉切支丹血脈續の事
- 一 切支丹類族届致方の事
- 一 京都町奉行所より有之帳面写の事
- 一 類族より出べき者の事
- 一 本人本人同然伺書の事
- 一 宗門改の節旗本より書上文言の事
- 一 同 大名方より書上文言の事
- 一 伺證又案詞の事
- 一 取置証又案詞の事
- 一 類族病死届の事
- 一 同 出生届の事
- 一 轉切支丹類族出生届の事
- 一 享保年中切支丹一件書付の事
- 一 村方より差出を注進書の事

- 一 檢使手代へ取置寺院村役人証文の事
- 一 代官より切支丹奉行へ差出を注進書の事
- 一 享保十八年切支丹奉行用人へ関合の事

卷之十四

- 一 口論檢使願書認方
- 一 行倒せ死人有之節檢使願書認方
- 一 家作願書認方
- 一 相撲願書認方
- 一 奉行所掛りの処宿預り成し節地頭支配への届書認方
- 一 吟味中病氣届の事
- 一 一定免切替請証又認方
- 一 一定免切替願書認方
- 一 目安初判請書認方
- 一 初て公事合は成評定所請り掛りへ出し節差上る差出し認方



- 一 評定所より差上る請書認方
- 一 過料錢上納書認方
- 一 片済口差出し認方
- 一 病氣より出牢宿預け申付らぬし節掛り役人へ差上る請書認方
- 一 市慈悲願書認方
- 一 評定所より於て地所見分申付らぬし節請書認方
- 一 差添人代り合願書認方
- 一 貸附役所より村方引受未納證文案文請取書認方
- 一 先觸認方
- 一 内済口證文案認方
- 一 宿替願書認方
- 一 牢屋見舞願書認方
- 一 吟味中猶豫願書認方
- 一 同 掛合の上内済致し度連印を以て猶豫願せし処示談行届り破

- 一 談り成し節の届書認方
- 一 同 預人并手鎖の旅人月代允願書認方
- 一 預手鎖人有之節請書認方
- 一 腰掛へ双方出し節翌日は呼出し請書認方
- 一 村へは尋の儀有之廻状より觸達しの節否の請書認方
- 一 差紙頂戴市差日より延着の節差上る書面認方
- 一 訴詔入市判頂戴相手銘くへ相附差日以前出府着届書認方
- 一 奉行より歸村申付置をし処猶又日限り付出府着届書認方
- 一 改印届書認方
- 一 吟味中引合入市呼出し差紙頂戴着届認方
- 一 同 代人引受の節書面認方
- 一 相手取らせ市判頂戴差日以前着届認方
- 一 同 代人引請し節同様返答書へ相添へ差出を書面認方
- 一 市判附られし節相手方より訴詔方へ遣は拜見書認方

交正也方... 総目



- 一 吟味中連印より日延願書認方
- 一 同 破談届認方
- 一 吟味中飯村願の事
- 一 同 欠落せし者日限尋申付らぬ日限に成訴書認方
- 一 平常欠落者訴書認方
- 一 虫火届書認方
- 一 盗賊に逢し節訴書認方

校正地方落穂集總目錄畢

校正地方落穂集卷之一

目錄

- 一 地方六の法發り并地方名目の事
- 一 井田古法の事并圖式附愚案○田籍の事
- 一 國分の事
- 一 五畿七道定りし事○五畿の事○七道の事
- 一 郡郷邑里村巷定りし事○國郡庄郷里の事
- 一 村里の事○田畑及別制作の事
- 一 賦稅徭役の事○耕作制の事
- 一 土民辨別の事
- 一 大間檢地步敷の事○同五六の敷の事



- 一 町割の事アツク○境の地サカイチは炭スミを埋ウツる事
- 一 關東關西の事クハントク○所領レヨクの事
- 一 村里田畑開闢の事ムラノクサタ○同善惡ドウゼンアクを知シル事
- 一 土の善惡ツチノゼンアクを知シル事トナシヨウ○土地見様の事
- 一 村柄ムラカフの事
- 一 古料コリョウの發ハツり并ナラ京料ケイリョウは直ナラを發ハツの事トナキ○斗ト松マツ太タイの事
- 一 金銀兩目積發キンギンリョウメツキハツの事
- 一 鑊錢カクセンの意呆イモ并ナラ九六目救クウロクメクウの事
- 一 金一分キンイチブと百匹ヒャクヒと云イフ事
- 一 田地デニゲ永代賣エイタイウリ停止發テイジハツの事

校正地方落穂集卷之一目錄畢

校正地方落穂集卷之一

信陽 東條耕子藏 校

○地方六の法發ハツり并ナラ地方名目の事

一 夫大極ウツキ二儀ニギは判ハカを清スミて輕カホき物モノハ上ウヘを天アメと成ナリ獨トナリて重オモシき物モノハ下シタを地チと成ナリ天アメを圓マダカとして地チを方カタあり天地開アメチヒくを自然シガラレ方角ハツカクナル成ナリ所トコロ謂イハレ東西南北也トウナンペキナリ

を首ウヘと天地四方アメチヒヨウを六合リクゴクと云イフ天アメハ陽ヨウとして地チハ陰インあり陰陽合體インヨウカウタイして萬物マンブツを生成セイセイ是コトを以モツて天地四方アメチヒヨウの六數ロクスウと地方チカの根元ネノヘとし古今六の數コキンロクノスウを以モツて土地チカと分量ブンリョウと云イフり又名目ナナメを地方チカと顯アハる事コトハ都ツて地チの方境ハツマキは盈モツる物モノ森羅萬象シンラマンゾウ悉シツ皆ナラ地チに屬ツクせんト云イフふし故ユヘに土地チカは附ツクる事コトを指サシて然シカドモ名地方ナナメチカと号ナヅクるあり



○井田古法の事并は圖式附愚按

一井田ハ方一里一六丁の田と一井とし其中は井の字と畫を九區と成各區は百畝にして俱は九百畝あり中の百畝を公田とし外の八百畝を私田とす是を八家に分ち中央の百畝を八家より耕養し貢納を是を唐虞三代の良法あり

一周家井田制は曰八家と一井とし四井を邑とし四邑を丘とし四丘を甸とん甸の即ち十六井ありと云々

井田之圖

私田 百畝	私田 百畝	私田 百畝
私田 百畝	公田 百畝	私田 百畝
私田 百畝	私田 百畝	私田 百畝

方田を九に割り中の百畝を公田とし八家之を耕して公納し外八百畝を八家に分ち之を民の田徳とする也

一阡陌ハ井田の畔として東西南北の道を云ふ然るは畔道多くして田地狭き故後世に至り之を開き田を多くすると云々

一井田の古法を按るは井の字の四畫ハ陰數にして井ハ陽の器物九の數ハ陽中の陰あり是を以て陰陽合体して萬物能く生し實乘の儀を取と見えたり又百姓ハ井水の如し井水節は汲るときハ一ツの井より百家とも潤むるべし是則ち汲は猶豫あるときハ水休むる故也然る時ハ萬代も尽るをふし左あらし火急は汲立むハ水勢忽は濁ま泥混して水徳を失ふ百姓の貢を納るも亦此の如し節は之を取立る時ハ百姓痛む萬代も尽るをふし子孫業を失ひ必又賦稅嚴重あるときハ民疲る民疲るハ土地實の土地實の土地實の土地實の土地實の土地實の土地實の時ハ遂は業を失ふに至る夫百姓の懸命とある處を田地なり是に於



て萬代不易の利を以て井水は對して古人井田の法と作為し民を撫育し土地を闢しと見へし

○田籍の事

一方六尺と一步とし三十歩を以て一畝とし十畝を一段とし十段と一町とし三十六町を一里と云  
一東西と豎とし之を陌と云南北と横と云之を阡と云云  
一司馬法井田制は曰六尺を以て歩とし百歩を畝とし百畝を一夫とし三夫の受る田を屋とし三屋を一井とし四井を邑とし四邑を丘とし丘より馬一匹牛三頭を出る亦四丘を甸と云甸より兵車一乘戎馬四匹牛十二頭甲士十二人士卒七十二人を出ると云

○國分の事

神武天皇寰宇を平定し給ひてより海内靖寧ありし

崇神天皇の御宇に至り邊境の夷狄 王化は及ぶるし四道は將軍と遣はし之を征定し給ひしより四夷八蠻 朝貢を献るるに至る其後

成務天皇五年始て諸國の經界を分ち國造者の如しと云を國々定む其

御宇の國名ハ山代大倭浪速津和野紀伊近淡海江伊勢尾張三河遠淡海遠江珠流河甲斐伊豆相武元邪志總安房也三野斐陀科野毛野今の上野蝦夷也越陸道佐渡丹波但遲馬針間吉備中備前備後波伯出雲石見意伎安伎周芳穴門長門淡路粟讚岐伊余都左筑紫前筑豊今の豊後襲肥火肥日向大隅薩摩伊吉對馬等あり其後大あるを割き小あるを併せ沿革数ありて遂に  
淳和天皇天長元年國名全く定り六十六箇國の國名 二島壹岐と成し也



○五畿七道定りし事

神功皇后攝政の御宇五畿七道と分ち國の上中下を撰び田畑の税物と定  
め其後三韓御征伐の御時彼國より井田の圖法を得給ひ是より土地の  
高低を檢し溝洫を通し天下を遍く農を教へ給ひしと云々

○五畿の事

一五畿といふ八百里の國中よりて  
天子の饗膳を備ふべきと云所謂山城大和河内和泉攝津是を中州とし此  
五國を畿内と号け是より遠方より使を遣はゆる其道七道なり

○七道の事

一 一より東海道十五國二より東山道八國方今十三二より北陸道七國四  
より山陰道八國五より山陽道八國六より南海道六國七より西海道九

國七道合せて六十一國此外西海道二島壹岐及び右の國々何れも大  
小上下の別有り亦古へ筑紫は太宰府奥州は鎮守府羽州は秋田城を置  
給ひしと云方今東山道の内陸奥を割て五國前陸中陸奥とし出羽を分  
て二國羽前とし更は蝦夷を裁割して十二國渡島後志石狩天塩北見膽  
埤と成北海道と改稱し總て五畿八道八十三國二島と成し也

○郡郷邑里村巷定りし事

一上古既々國郡の境界定るといふは後世其法を失ひ經界正しう  
るよりして隣郷互ひに争鬭を起さざる因  
聖武天皇の御宇吉備公僧行基僧泰澄の三人 勅を奉りて天平七年より  
同十七年より至り十ヶ年の間に諸國の郡郷邑里村巷の境を定め撰之其  
内泰澄は東國を制し駿河より中國迄の行基之を奉り中國より西國迄



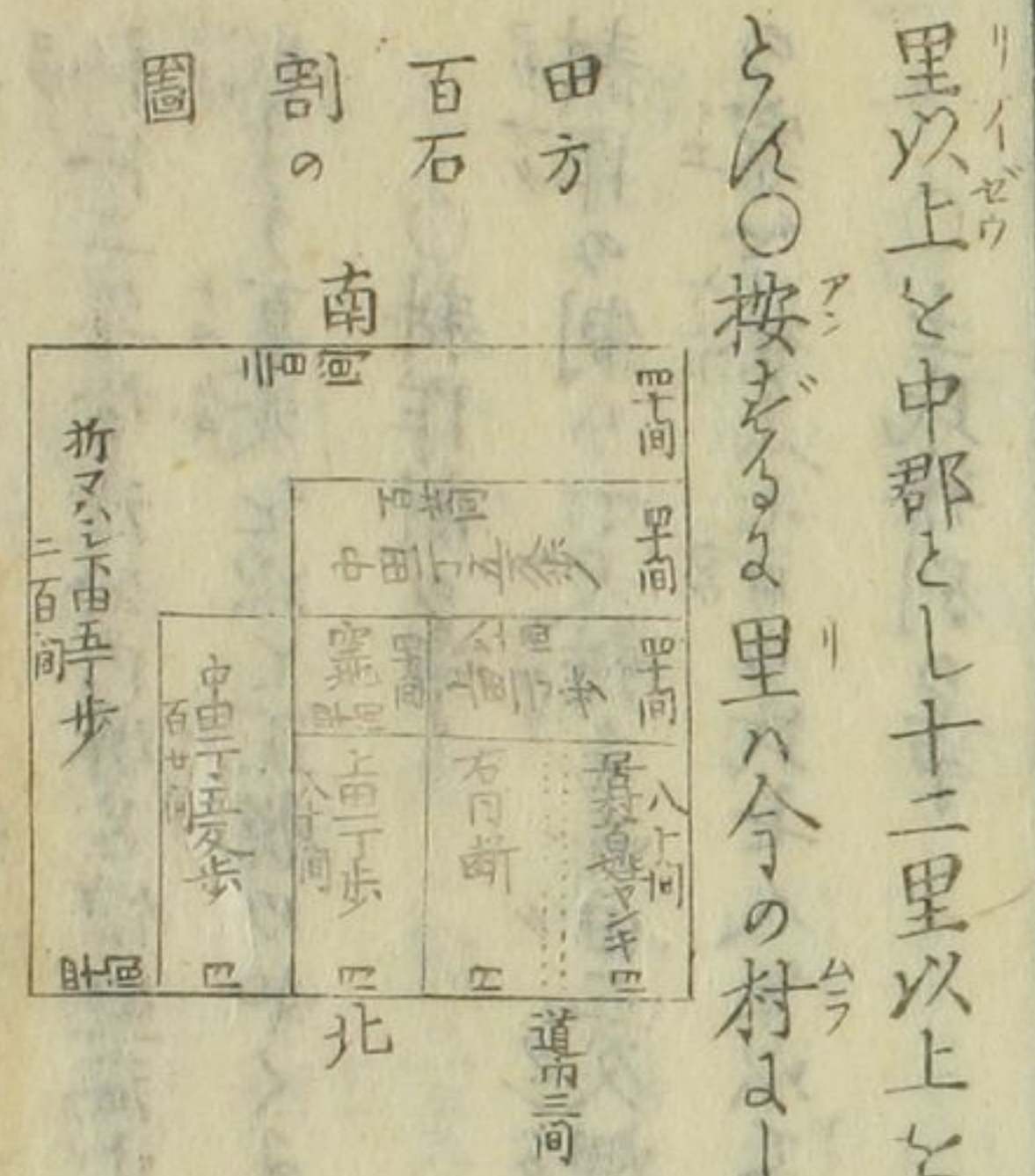
ハ吉備公之と改正をと云

○國郡庄郷里の事

一國の中郡より郡の中庄より郷より國郡に依て其名異あり又庄郷の内より里より里の内より名あり田畑一丁と以て名と何れも廣狭同じくは從是國の大小に因てあり又東西六町南北六町を以て一里と云道路は分つ時ハ三十六町と一里と云田畑は約を時ハ六六三十六町ある故方六町と一里と云地を分つ類皆之を以て分別をあるあり

○村里の事附田方百石地割圖

一一家と一戸とし五十戸を里と云一里毎に里長一人を置いて戸口を檢校を亦十家は足らざるは他の大村へ加入し六十戸は餘る時八十戸を割て一里と建長一人を置く凡二里以上と小郡とし四里以上と下郡とし八



○田畑及別の事

一吉備公僧行基泰澄の三人勅を奉りて田畑を分六尺四方を一歩とし三百六十歩長三十歩横十二歩と一段とし十段を合て一町と云土地一反は生をる米十二合の料を以て三石六斗四石二種しと云此外上中下の品土地は寄郷に隨て差別有ること也



○賦稅徭役の事

一根本世鏡抄曰田畑は出る処の五穀廿分より其一分を貢物と備へ  
 其他ハ庄官下司公文ホへ給ひ其時因て其用其職は補せらるると云  
 一弘仁式曰日上田一段の地子稻十束中田八束下田六束下田三束と云  
 一拾芥抄田令曰稻五把と以て一束と為と云  
 一弘仁二年菅清公内麻呂僧空海ハ勅を奉て賦稅徭役の事を制し此時  
 代より夏麦を以て正稅の如く納し秋は是當時の謂ゆる夏成あり

○耕作制の事

一耕作の制ハ一夫耕を所田三反畑三反二夫の職一町二反を以て民七口  
 の家を養ふ七口の民七人を以て傭夫一人を出を是 朝廷の夫役也

○士民辨別の事

一十二町の穀を以て養ふこと十民一民十人とし百廿町の穀を以て養ふ  
 こと百民凡そ百廿町の制度と能知と士と名け千二百町は十人の士也  
 亦士十人と知と武と武は戈と止ると云字なり一萬二千町は武十  
 人あり之と治ると吏と云二吏に至て國司ハの儀あり又一吏の國司受  
 領あり何れも民の勸めを任せて之と課を受領の國司と遣はると其  
 任四年ニ過を然も共其人賢徳ありて國人其人を渴仰する時ハ重任を  
 することあり凡一國を管領する人賢才ありてハ國民治まらば遠く天下  
 疲弊を至る亦上古ハ大氏二千石と重祿とん是上代の仁政あり

○大閤檢地の事

一大閤秀吉公治世の後慶長年中是康坊其術の名人も命を諸國を檢地せし  
 む然るに越前國に至りし時豊公他界有しより半途を止め故に



今に至る迄古代の検地残りて所々あり豊公の五六の數を以て土地と改め國の高及別と増を之と大閤検地と云三百歩を以て一反とし二百歩と大歩と云百歩と小歩と云五十歩と半歩とをも也

○大閤検地五六の數の事

一古法を六の數を以て歩數と定む然るは慶長の検地は五六の數を用ふることハ按するは古法六六の數ハ天地四方を合せたる數を世界に盈たる數也然るは滿とハ欠るの儀なり又六六ハ豎も横も陰陽の分もふし愚按は方角ハ地は属する多れば中央と上とし四方ハ東ハ水南と北と合せて五行と成五行都て離るるべしと皆土を体と成故に田畑分量の數は應をもと以て五の數を加へ用ると見へたり又六ハ陰より五ハ陽より是所謂陰陽氣を合して萬物を生るるの儀と取五六

の數を用ひしと成ふるべし

○村里田畑開闢の事

一上古國と建民と居らしむるは必だ土地の理と考へ水勢の及ぶる所は於て家と造り棲居と營と大河の激波と防ぎ小川の細流と注ぎて乾燥の地と潤不し泉濕の地と田とし高原と畑とし堤と築て洪水は備へ溝と強て用水は當人民耕して之と田作り又耘耨して畑と管と三人五人爰は群と成し久しく損害ふらば漸次集會して遂に村里と成しふるべし今の新田開闢之は准也

○町割の事

一町長六十間を以て一町とし六十間四方を以て屋敷割と定め兩側の眞行と廿間と極め残り廿間と道幅并は水道境目ハの料は用の間口ハ大



小定りふし

○境の地は炭を埋る事

一 地境は炭と埋るハ吉備公等の三使國郡の境と改る時境の地は炭と埋しと云炭の土中是有て決して朽ける故あり炭と境と云と之と始と云

○関東関西の事

一 往昔の逢坂の関より東と関東とし又坂東共云関より西と関西と云然るは今逢坂の関ふし依て箱根より東と関東と云る也 逢坂を近江は在箱根ハ相模は在

○所領の事

一 一は家の所領二は永代給の所領三は官職所領是ハ其器は當る人と以て其職其官は居る時所領と給はる 爵代の役是ハ子孫は傳領せむとふし上古を大畧此の如きなり

○村里の善惡を知る事

一 村方全体の善惡ハ地形の高位と方向の方角より寄る東南位ハ西北高きハ上マの村也如何とあれば西北高き故は寒氣薄く東南位ハ日受よく又水落りよし依て諸作実のり也東南高き南ハ山有を惡地あり陽氣を受くぐして水落惡くハ也

○土の善惡を知る事

一 土地を色くよくして悉く善惡なり先畑を以て云バイナゴ真土と上くと土の色麁香色よく土細く粘有て塊ありハ潤ハ有能肥を受て実赤よし次よを真土と上くと土の性粘強く土堅き故種物土より馴く也又小石交をよし然れども土堅き故種物土より馴くバ種物塊は堅らばて生立苦し又土



荒き故イナゴ真土より日透き易し然共肥と多く入る能出来る  
土也ヘナ真土と云ハ色青白くして土性堅く粘強くとる多難し是中  
の土也又野土所より有其内黒野土と云く其土浅く粘薄し然  
る共肥と過分入る殊の外よく出来る土也又湿りたりて日負せ出  
る也山野土と云ハ宜しき其色赤く潤ひあはれ多く粘ふし  
又赤野土の中にも黒めりて潤かるハ黒野土と准じて善と云鼠色と云  
灰の如く成り至て悪し土軽くと風吹散ける是ホハ只肥の精の  
りて実乗也又ゲド土と云く土塊と毛の如く筋有るなり是の多く田は在  
下くの土也此外土性品々なり何れも右に准じて知るべし

○土地見様の事

一用水堀溝の如くよく浅き水掛り自由の場也是ホの土地ハ田麦と

一作ら兩毛作の場と知べし又用水堀深きハ水元遠くく遠方の水と引  
と知へし又用水堀多きハ高場也惡水堀多きハ水損の地也四壁あり  
又有とも無が如く斑々として都て大水ふまハ水入場也此邊ハ水塚と  
て百姓の居所は高く築上る地有りの也又村上ハ大沼大川ふとを花  
へ或ハ村下一二里の間ハ大なる流有ハ水落悪く大水の節ハ逆水より  
水湛ハ水損多きもの也又百姓の田ハ置藁の元ハ水溢付て其色黒く或  
ハ茅垣の根元黒きハ深場と知るべし又稻株高く刈て見ゆるハ深場也  
但し岡田の様は見え株高く刈たるも去年水損有し地也是ハ一体地也

○村柄の事

一其村へ入て四壁茂り家居并に田の締り能ハ上村也物下を村柄を見  
るハ其村高と人馬の數とを見合せ知べし高百石ハ人負百人有る上

校正地ノ各集



村也馬之<sup>ニ</sup>准<sup>ズ</sup>也又職人商人醫者山伏道心坊<sup>ノ</sup>の遊民多<sup>キ</sup>村<sup>ニ</sup>是亦上  
 村也其村繁<sup>ハ</sup>花<sup>ノ</sup>と右<sup>ノ</sup>体<sup>ノ</sup>の者渡世仕能<sup>ク</sup>ゆへ自然<sup>ニ</sup>爰<sup>ニ</sup>集<sup>ル</sup>り又入數多<sup>キ</sup>村  
 方ハ福有成<sup>ル</sup>故<sup>ニ</sup>他<sup>ノ</sup>村<sup>ニ</sup>へ出<sup>ル</sup>る奉公人<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>他<sup>ノ</sup>村<sup>ニ</sup>より村<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>へ奉公人<sup>ノ</sup>入<sup>ル</sup>込<sup>ル</sup>故<sup>ニ</sup>也  
 一其村へ入<sup>ル</sup>四壁<sup>ニ</sup>斑<sup>ニ</sup>ある<sup>カ</sup>飲<sup>ム</sup>或<sup>ハ</sup>四壁<sup>ニ</sup>もあ<sup>ル</sup>く家居<sup>ノ</sup>垣<sup>ノ</sup>の破損<sup>ニ</sup>と獸<sup>ノ</sup>の庭<sup>ノ</sup>  
 構<sup>ヘ</sup>草<sup>ノ</sup>深<sup>ク</sup>見<sup>ヘ</sup>るハ困窮<sup>ノ</sup>の村<sup>也</sup>又村<sup>ニ</sup>へ入<sup>ル</sup>何<sup>ト</sup>とあ<sup>ク</sup>そ<sup>ノ</sup>く<sup>ト</sup>し<sup>テ</sup>物<sup>ノ</sup>淋<sup>シ</sup>  
 さま<sup>ニ</sup>至<sup>テ</sup>て<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>の村<sup>也</sup>又家居<sup>ノ</sup>見<sup>テ</sup>苦<sup>ク</sup>とも其<sup>ノ</sup>村<sup>ニ</sup>ハ山林<sup>ニ</sup>皆<sup>ニ</sup>野<sup>ニ</sup>亦<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>或<sup>ハ</sup>結  
 場<sup>ノ</sup>散<sup>ル</sup>場<sup>ノ</sup>ホ<sup>ノ</sup>有<sup>ル</sup>村<sup>ニ</sup>を内証<sup>ニ</sup>善<sup>ク</sup>も<sup>シ</sup>也此<sup>ノ</sup>の如<sup>キ</sup>村<sup>多</sup>くハ野向<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>也  
 一又市場<sup>ノ</sup>河岸<sup>ノ</sup>場<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>外<sup>ニ</sup>定<sup>式</sup>作物<sup>ノ</sup>の外<sup>ニ</sup>綿<sup>綿</sup>茶<sup>茶</sup>木<sup>木</sup>綿<sup>綿</sup>麻<sup>麻</sup>布<sup>布</sup>外<sup>ニ</sup>稼<sup>有</sup>村<sup>ハ</sup>上  
 村<sup>也</sup>又夜<sup>令</sup>右<sup>ノ</sup>体<sup>ノ</sup>の助<sup>成</sup>あ<sup>ク</sup>共<sup>ノ</sup>田<sup>地</sup>は延<sup>有</sup>をよ<sup>シ</sup>入<sup>ル</sup>遊<sup>地</sup>もあ<sup>ク</sup>田<sup>畑</sup>並  
 能<sup>ク</sup>伏<sup>テ</sup>地<sup>計</sup>り<sup>ノ</sup>の村<sup>又</sup>少<sup>ク</sup>町<sup>場</sup>もあ<sup>ク</sup>里<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>村<sup>ハ</sup>村<sup>柄</sup>よく見<sup>テ</sup>え<sup>ル</sup>とも見  
 掛<sup>斗</sup>り<sup>テ</sup>内<sup>証</sup>宜<sup>シ</sup>し<sup>テ</sup>る<sup>村</sup>也

一山<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>濱<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>數<sup>多</sup>く共<sup>ノ</sup>村<sup>柄</sup>の目<sup>的</sup>は成<sup>ル</sup>濱<sup>方</sup>ハ田<sup>地</sup>亦<sup>ニ</sup>只<sup>ニ</sup>漁<sup>獵</sup>の  
 と<sup>ノ</sup>業<sup>と</sup>なる<sup>故</sup>人<sup>々</sup>を大<sup>勢</sup>有<sup>也</sup>然<sup>レ</sup>共<sup>ノ</sup>魚<sup>獵</sup>ノ風<sup>雨</sup>の凌<sup>又</sup>ハ一<sup>向</sup>不<sup>獵</sup>  
 日<sup>も</sup>多<sup>ク</sup>適<sup>大</sup>獵<sup>有</sup>も平<sup>日</sup>他<sup>借</sup>して合<sup>日</sup>と暮<sup>ル</sup>故<sup>中</sup>身<sup>ヲ</sup>付<sup>テ</sup>依<sup>テ</sup>河  
 也<sup>も</sup>貧<sup>乏</sup>之<sup>也</sup>又山<sup>方</sup>ハ打<sup>開</sup>たる<sup>田</sup>地<sup>あ</sup>く山<sup>谷</sup>の間<sup>又</sup>ハ山<sup>ノ</sup>内<sup>日</sup>受<sup>好</sup>き  
 处<sup>と</sup>切<sup>開</sup>き<sup>作</sup>ると<sup>ノ</sup>共<sup>ノ</sup>地<sup>面</sup>宜<sup>し</sup>る<sup>故</sup>五<sup>反</sup>有<sup>テ</sup>も里<sup>方</sup>の一<sup>反</sup>  
 程<sup>も</sup>取<sup>難</sup>く殊<sup>ニ</sup>丹<sup>情</sup>を<sup>仕</sup>付<sup>セ</sup>し<sup>地</sup>と猪<sup>鹿</sup>糞<sup>あ</sup>く<sup>ハ</sup>荒<sup>ら</sup>し<sup>手</sup>を<sup>空</sup>  
 なる<sup>正</sup>多<sup>シ</sup>依<sup>テ</sup>カ<sup>ノ</sup>及<sup>ぶ</sup>程<sup>山</sup>と切<sup>開</sup>き<sup>し</sup>地<sup>所</sup>を<sup>廣</sup>き<sup>も</sup>也<sup>又</sup>切<sup>替</sup>  
 畑<sup>ふ</sup>と<sup>云</sup>ハ一<sup>反</sup>より<sup>も</sup>帳<sup>面</sup>より<sup>も</sup>五<sup>反</sup>有<sup>也</sup>是<sup>土</sup>性<sup>宜</sup>し<sup>る</sup>也  
 て一<sup>年</sup>一<sup>毛</sup>作<sup>ら</sup>し<sup>外</sup>取<sup>上</sup>ら<sup>ズ</sup>其<sup>上</sup>翌<sup>一</sup>年<sup>ハ</sup>其<sup>畑</sup>と差<sup>置</sup>其<sup>次</sup>の<sup>所</sup>と  
 草<sup>木</sup>と<sup>焼</sup>て<sup>之</sup>を<sup>掘</sup>返<sup>し</sup>畑<sup>と</sup>成<sup>蒔</sup>付<sup>件</sup>の<sup>焼</sup>灰<sup>肥</sup>と<sup>成</sup>て<sup>其</sup>年<sup>ハ</sup>出<sup>来</sup>る<sup>也</sup>  
 此<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>段<sup>々</sup>作<sup>ら</sup>し<sup>行</sup>き<sup>五</sup>年<sup>目</sup>程<sup>又</sup>元<sup>ノ</sup>所<sup>へ</sup>立<sup>戻</sup>る<sup>左</sup>と<sup>ハ</sup>五<sup>年</sup>也



前の処を荒果小苗木多く茂ると又焼立りあり冬向遠山は此の如く  
根難し何と取ると見ると粟稗蕎麥の類より外は出来む夫も里方  
の三分一程の穂を立毛も少く又手入肥とをるも山坂を上下し家  
居遙く又遠く見上るが如き所へ持運び自然手入の肥も薄く出来栄も  
ふし此の如き故場を廣く作り地嵩りて少く充取集りより人負も多  
く掛り小作造を喰て成難し去へ五人七人暮りても皆作は掛り又作の  
間よと薪を伐て里へ持出し少く充の錢を取らぬうは塩茶の類と調へ  
稍く其日と暮は去へて此の如き故内証は殊の外困窮也又至ての山中  
を作物もあらず立木を伐て板角平物亦是木取里へ脊負出し少しの賣  
代と以て夫食を調へ又朽の実ふとと取り粥を煮て朝夕の給物と成都  
て山方濱方ハ此の如き事人多く入ゆへ人数の多きも村柄の目當り

あり谷とハ之を云也去ハ箇様の処ハ年貢取箇付ふと用ひ勘弁を  
なし山方ハ場所廣く内証宜しき者一際よ心得るべし  
一山方よ内証宜きと云ハ山下の村の正也是ハ後ハ山有て山稼も出来  
前ハ谷打開けて作場も多し里方同然也殊に箇格の処ハ桑漆楮ハ有  
て蚕と飼又ハ紙を漉き蠟の实柿渋水と出し又田方ハ山寄ありハ地面  
又延有て取箇ハ里方より低く飯令高免りて此の如き地ハ田畑の外  
助成多き故痛は成む箇格の処ハ村は寄あふせ免とて田畑より出る  
外の米水と掛て取ると有今ハ秋又領ふと山方あるは田畑の外は物  
成運上物多く格別宜き処也是ハ所の人知む福有の者あり也  
○古料の起り并京料は直を發の事  
一古料ハ五寸四方深二寸五分也と云り是ハ一尺四面の物と四ハ割堅と

古料ハ五寸四方深二寸五分也と云り是ハ一尺四面の物と四ハ割堅と



又四ツは切せハ方五寸深二寸五分と成依て四十六の根元一より發  
し也尤も一と萬物の起るるれ然るべき法あれ共近代方四寸九分深  
二寸七分と直せし據と考るるは枘を萬物と改め量る器也然ると一尺四  
面の物と四ツとくは截り五十二寸五分とい誥たると云べし又萬物  
一より發て一は飯し一を小數の満る処より位と進めば大數の極に至  
る都ての物満るハ欠るの儀有是と以て四寸九分二寸七分は直と見  
えらる然るに四寸九分と二寸六分とも有べし共左をハ古枘より  
量器の步數減るより猶豫と付て二寸七分は直せし成べし

○斗強太の事

一 一升枘より一合枘迄斗強の大を枘の底に記したる焼印の直径を用る  
也五升枘一斗枘皆右に准む

一 金銀兩目積り起の事

一 金銀ハ世界の至宝として各國之を以て萬物通用の至極とん夫世界の  
形ハ雞卵の如しと云り金銀ハ世界の寶成より其形容を取鶏卵の白  
色の目數をとりて銀の兩目とし黄の量數を以て金の量目と云

○鑄錢の意果并九六目扱の事并錢を鳥目と云事

一 古へを調百を以て通用を今も遠國ハ古風残り調百を以て通用を  
所より此調百を鑄と唱へ中古より通用する九六百を錢と云又錢を鳥  
目と云と往古の錢を更此の如き形を鳥の姿也此目と覺しき処へ鑄  
を貫く故鳥目と云と此錢今も古錢の内は有是ハ唐錢と昔  
神功皇后三韓御征伐の時是を彼邦より得玉と云説あり其以後 日本は  
てや此錢を鑄て用の玉はしと見えたり又金錢銀錢も通用せし也古



顯宗天皇の御宇銀錢一文を以て米一石は替へしと古書に見えり今錢  
と九十六文は直し通用を多てハ調百を六ツハツ十二十六割と云ふ  
何れも端分出て通用自由なる又調錢にてハ數詰り一文欠ては不都  
合と成又九六錢を六ツハツホは割ても端分出を筆用の通ひ宜しき故  
九六錢は改めし成へし

○金一分を百匹と云事

一古ハ鑿四貫文を以て金一兩は通用しの時寄相場金一分は一貫文也然  
るも古來を駒曳錢といふ佛と云と鑄て一文を常の錢十文は替ると云近  
大錢を鑄し又鑿百文の内十文充の間へ駒曳錢一文を加へると云ハ  
是の例也又鑿百文の内十文充の間へ駒曳錢一文を加へると云ハ  
之は依て鑿十文を一匹とし百文を十匹一貫文ハ金一分は對するゆ  
金一分を百匹と云也○目錄は何百匹とをると馬代は用る故とも云ハ

○田地永代賣停止發の事

一田地永代賣停止の儀ハ徳川家祖宗治世の時より定ると云ハ其詮ハ右  
の停止ふ々ねハ金錢を多く持たる者ハ浪人町人百姓は限らば金銀の  
有る任せて買取は遂は一村一郡一國とも私の有るはべし然る時ハ  
其者の威勢次第強く成終は上を凌ぎ一揆とも起し國郡騷動の種と  
成べきことを考察し且ハ身上不如意の百姓を代々所持の田畑は離れ自  
然退轉をばき錢を推恕せし堅く之を禁せしと云是尤も仁政あり  
一往昔源義家奥州の亂を鎮靜の爲彼地へ下りし時下野國塩谷郡に至る  
此里又一人の郷士ハ構ハ一段高き所より其住居の廣大嚴重なる  
こと四方は門と立堀を構へ堀を囲ひ家人充滿し金銀財宝藏は満武具  
馬具の類過分は貯へしと云事足すと云云と云近邊皆此者の持分は



一 諸人の尊敬云々あり威勢遠近より集ま之を塩谷の長者と称す  
 義家士女と共い爰に止宿せしむ皆田の内は宿し夫々の備へ一とて  
 手支へふく其華嚴実を盡せり義家奥州平定の後かゝる者と地下に  
 置てハ謀叛人の媒と成又ハ自分一揆とも起さるべし其節之を退治せん  
 又ハ民の煩も多りるべしとて後年其家と及收し然らば其跡を建しと  
 うや其古跡廣原と成今も長者が原と名け礎丹くは残り在と云名將の  
 後事と云ふハ民の疾苦を除くと此の如し  
 一 徳川家祖宗治世の始め永代賣停止の仕置も是も同じ名君の先見古今  
 等しきと割符と合せざるが如し

東京 大月忠興 補訂

校正地方落穂集卷之一 畢

校正地方落穂集卷之二

目録

- 一 石盛仕出しの事
- 一 田畑六分違ひ一五の法誤りの事
- 一 関東二石五斗替の事
- 一 同二石五斗替厘付の事
- 一 厘付の法への發の事
- 一 廿貫百石と云事并永の四割替高二割替と云事
- 一 上方厘付并三分一銀納の事
- 一 同銀納直段関東直段は二割高の事
- 一 上方関東取釣合の事



- 一 永の四割替高の二割替高の五石替再談の事
- 一 田畑六分違厘付反取勘辨の事
- 一 山野海川高よ結ぶ法の事
- 一 存後小物成臨時物の事
- 一 高の五石替考の事
- 一 山方一毛作の場所高よ結ぶ勘辨の事
- 一 早損水損干減立方の事
- 一 叔摺取分勘辨の事

校正地方落穂集卷之二目錄畢

校正地方落穂集卷之二

信陽 東條耕子蔵 校

○石盛仕出の事并算法

一 石盛斗代を積ると古入井田の法を考へ其國其所土地の善惡并利害得失を勘辨し山野海川共貫高石高の法を立高よ結び後世の掟と云上方又三分一銀納と云有閑東は二石五斗替の法又永の四割替高の二割替廿貫百石十町百石ふと云法有右何れ貫石とも高よ結び云ことふし

一 石盛を定ると先土地の位と極ると第一也土地は數品有其一品の内は又甲乙有然共類を集め土地の位は准じ其村限は上中下三段は極



め三段の内に入難きハ下田悪地と位を付又右一段の内より出来方  
 甲乙有べし又土性を勝多としか家居近くして用水掛り自由の処ハ上  
 の位より有るも有又上土とつへども用水の掛引難儀あるも或は遠場は  
 て肥し手入不自由成処又ハ東南を塞た陰地と中下の位より有るとも  
 あり右様の事は付一段同位より一升二合の立毛も有り又ハ一升或  
 を八合九合は出来りも有故に此三段を平均し其中分を以て其位より石  
 盛を仕出をとまの甲乙ふし凡石盛を仕出を法一より起り一又飯以土  
 の位上中下と分るときハ上の位を指て一とん之は依て上田一歩は生  
 まる所一升と一と高石盛を仕出し之を以て百千萬の石高を量り上  
 る也飯令ハ器ハ物を積重ると盛と云意呆れ石高を積上ると石盛と  
 号く右一升の叔を以て石盛を仕出を算法左の如し

上田一反歩

一升毛

此叔三石

但五合摺の積よりして

此米一石五斗

内	七斗五升	公納
	七斗五升	百姓作徳

是を五公五民の法と云公納七斗五升と十五盛の根取とをる也今世上  
 又用る処の七五の法と云之を之あり但し五分取の法は用也

右を高五ツ取の厘取と當る也都て五ツを以て地方の法の元と  
 一石盛は右の法を立るとつへ共一体は此の如く五分をくまはるは右ハ  
 石盛仕出しの根元よりして是より次第を分つ也蘭田麦田ハの上田とを  
 五合摺五分取とをる也其外と土地の善悪土性の高下より石盛の法  
 品より四公六民は分る時を盛十五根取六斗也又一一反一升毛の叔を



千減二割引二石四斗と成と五合摺より一石二斗と成是十二の盛也  
 是と五分より取根取六斗と成又四分六分より分て四斗八升と根取と  
 定るも有之を其土地に應し色々勘辨の上執行ふ也石盛の取出し様先  
 右の通ふれ共前云如く土地より種々得失と考へ取を立る也又土  
 地又付助成行ふ所の單せ盛とて土地の助成を見込て石盛を高くする  
 としつり是れを河岸場市場其土地より出る産物其外助成も成べき物  
 と見込あり既甲州大門村と云所土地も宜く田畑立毛格別よく其上  
 紙と漉出し糸綿と出を市場より大金を取捌く村也此処石盛三十六  
 して千石余の村ありども境内いと狭し又合毛の内を減して石盛を結  
 ぶ所も有るべし土地又甲乙の品多々ねば幾段も名目と付石盛を次第  
 する也箇様の処を上地場よりふまきと也

一惣て根取を五ッ成と取法也五ッ成ハ五分の法と同じ然しあつた  
 田畑六分違ひの謂を以て厘付平均の時と五ッ成と取て實ハ四ッ  
 當る也

一石盛の段ハ野は寄一様あり孫共先ハ上中下何れも二ッ下りの法也然  
 共前記を如く地面土性立毛出来次第差をいふし又中より格別の  
 飛違も有り○畑方石盛を田方より六分違也但し石盛二ッ下りと云て田  
 と畑と二ッ下りあるを中田の石盛と上畑は當夫より二ッ下りして石  
 盛と定む然共中田の石盛と直上畑は用るハ誤あり○田畑六分違  
 ひの法を用ひて畑石盛を仕出を委く左記を

上田十二 高は五ッ取  
 又四斗八升

是ハ元来一升毛の内を二割引八合として一反の歩面三百歩を乗じ



二石四斗と成と五合摺<sup>ダウ</sup>し一石二斗是<sup>レ</sup>十二の盛<sup>モリ</sup>とを又五ッ取  
とし六斗是五分<sup>レ</sup>の取也然<sup>モ</sup>と右六斗の内と二割引<sup>キ</sup>四斗八升  
として反取<sup>シテ</sup>と極<sup>キ</sup>也盛<sup>モリ</sup>結<sup>ム</sup>がよも二割引<sup>キ</sup>取<sup>リ</sup>と付<sup>ル</sup>るよも二割引<sup>キ</sup>都合  
四割引<sup>キ</sup>也五ッ取と二割引<sup>キ</sup>ハ四ッ取と成五ッ取と記<sup>シ</sup>をハ虚<sup>キ</sup>重<sup>シ</sup>と實<sup>シ</sup>  
重<sup>シ</sup>ハ四ッ也上方関東共<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>ま反取<sup>シ</sup>ハ反取<sup>シ</sup>と四歸<sup>キ</sup>して石盛<sup>モリ</sup>を知  
る其法左<sup>ニ</sup>記<sup>シ</sup>て初<sup>メ</sup>の疑<sup>ヒ</sup>と解<sup>ク</sup>

中田十 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>四斗

下田八 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>三斗二升

上中下高合と三石

平均十<sup>ハ</sup>當<sup>ル</sup> 平均五ッ取 実<sup>ニ</sup>重<sup>シ</sup>四ッ

内取米一石二斗

上畑十 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>四斗 但し反石盛<sup>モリ</sup>あり

此永百六十文但し二石五斗替

中畑八 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>三斗二升 但し右同

此永百廿八文但し右同

下畑六 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>二斗四升 但し右同

此永九十六文但し右同

上中下高合二石四斗同取米合九斗六升

田畑高合五石四斗同取米合二石一斗六升

米一石二斗 永三百八十四文 但し二石五斗替

右と石盛<sup>モリ</sup>三ッ下<sup>リ</sup>反取<sup>シ</sup>の法也則中田の石盛<sup>モリ</sup>ハ上畑又准<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>と田畑  
六分違<sup>ハ</sup>の法と以て畑方石盛<sup>モリ</sup>を勘辨<sup>シ</sup>直<sup>ニ</sup>と左<sup>ニ</sup>の如し

上田十二 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>四斗八升 中田十 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>四斗 下田八 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>三斗二升

上畑六 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>四斗 中畑八 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>三斗二升 下畑三六 高<sup>ハ</sup>五ッ 反<sup>ハ</sup>二斗四升



此永百六十文

此永百廿六文

此永九十六文

但し二石五斗替

但し同

但し同

田畑高合四石四斗四斗

高五ツ

同取米合二石一斗六升

内米三石二斗  
永三百八十四文

右田畑六分違の勘辨を以て石盛と直を術より日前条の田石盛高三石の内畑石盛二石四斗を減たれば残六斗也此六斗ハ田畑両高と引拂へど拂跡田畑對様を然る時ハ田高六斗ハ畑高一石又對をと知るべし然れど田と畑と石盛二ツ下り成ゆへ中田の石盛上畑又對をるより中田の石盛又六と兼して中畑の石盛又用ひ下田の石盛又六を兼して下畑の石盛又六其位何程有ても心得同様也此の如くをるを中分の位として

地面土性の甲乙にて上田と上畑又用ひ下田と上畑又用るより又

右取米一石二斗の内畑の仮取米九斗六升を引を残り二斗四升なり此

本米也田畑兩取米を引拂ひ見をハ跡残り田畑對様を然るときハ此二

斗四升を畑高一石の取米と知る然をハ田の取米の如く畑の本米あり

前条の畑盛一石の仮取米四斗を以て右の二斗四升を除去れば仮米一

石又本米六斗と成之に依て前条の畑仮石盛又六と録して田方同様の

釣合又石盛を直と也但し畑方仮取米を元の如く五ツ取又居置べし是

ハ畑方二石五斗替の積りをして永納成るより釣合也國又依り田畑

米取と云ふはねど畑方と米取と云ハ誤也去る依て上方又三分一銀納

甲州は大切小切の永納奥州は半石半永など云法有て斗代盛を結ぶと

を田畑共又米又直と也是ハ石盛を仕出た術あり然をハ畑の取米ハ仮



取米と云て實米より又田の六畝歩と畑の一反と對をと知べし  
一取箇免相心田畑六分違の法は准じ勘辨の上次弟を合て取を付る是上  
中下三段を中分として考ふる也然るに田の取米程畑より倍米を掛  
て二石五斗替の永取と知るべし前条の直し石盛畑六ツへ五ツ取を乗  
じ取米三斗と成是を六分違の直段一石五斗を以て除るに二石五斗  
替の直段同様也

一田畑六分違と云ハ田高六斗ハ畑高一石は當る取箇ハ田米一斗ハ畑米  
六升と同然也之を依て田畑六分違と云○上方三分一銀納其外國の  
法種々ありども皆之と同意也

○田畑六分違ハ一五の法起りの事  
一六分違の法一五の起りハ高百石五ツ成田畑取分より起る委く左記

高百石 高五ツ取

此取米五十石 内廿五石畑方但し田畑等分五成は分たる也  
此本米十五石

術は曰高百石は免五ツを減し取米五十石を得之と田畑半分は畑米  
廿五石と成へ六分違ハの六を乗じ取米十五石は減之と六分違の法  
と為○又曰廿貫百石の積りを以て見れば畑高五十石の取米廿五石へ  
六分を乗じ減米十五石と成高五十石ハ永十貫文也是廿貫百石の法高  
然るに右減米十五石を永十貫文に對し見れば金一兩は一石五斗替  
當る今一五の法と云は是也但し一石五斗と實とて取米直段二石五  
斗を以て除し六分と成り  
一或人云石盛の起りハ新田畑開墾の年より鎌下三年の間の立毛を見る



べし仮令ハ一ヶ年ハ坪苧合毛一升一合有と一反三百歩へ乗じ籾三石  
 三斗五合摺よして米一石六斗五升又一ヶ年ハ坪苧一升より一反よ籾  
 二石米よして一石五斗又一ヶ年ハ坪苧九合より一反よ籾二石七斗米  
 よして一石三斗五升と成此三年の米合せて四石五斗と成平均よして  
 一年一石五斗と成之を石盛の古法と云又根取ハ大石盛半分を用ゆ  
 と然りとソレども上方筋を田畑宜き故麦田多き場ハ五分よりよても  
 百姓痛ハ関東筋ハ上方より地面劣り下地の所多き故五分よりよても  
 ハ麦田有処ハ上方より難儀也況んや麦田ふき所を必と困窮ハ及ぶ  
 故ハ四分六分の心當よをべき也  
 一 上方関東ハ限らば田畑米取投免及取永取銀取とも高を結ぶハ取  
 箇よ以て極も也是米永共ハ高の五石替水の二石五斗替と云法あり又

高の二割替とも云委ハ左ノ記を奥羽ハ六石代七石代又ハ三石五斗  
 替五石替ふと云種々の法ハねども関東上方の法を以て考す時ハ分明  
 ありと云ふし

○ 関東二石五斗替起りの事

一 関東二石五斗替と云ハ廿貫百石五ツ成と云より起し也廿貫百石と云  
 ハ上方も同じと云く高を結ぶよと田斗よりとも畑斗よりとも山野海  
 川とも田畑とも結ぶ也又百石の地五十石を田とし五十石ハ畑と  
 して結ぶも有り田高五十石の物成廿五石を本米畑方五十石の物成廿  
 五石を仮米也此廿五石ハ六を乗じ十五石と成之ハ田米廿五石を加へ  
 四十石と成之ハ依て四十石五ツ成と云也  
 一 右十五石ハ畑高永十貫文の本米也然るハ一貫文ハ一石五斗替の直段



と二石五斗と見へる此二石五斗を畑高永十貫文と畑の仮米廿五石と對したる二石五斗あり

一石四十石五ツ成と云ハ虚厘也田方本米廿五石畑方仮米廿五石合と五十石と高百石と對し五ツ成也然共畑方六分違の勘定とて田畑取米四十石と成此四十石と高百石と對しする時ハ実厘四ツ當り

○二石五斗替厘付の事

一高百石三ツ成と云ハ米十五石 永六貫文 一高百石三ツ五分と云ハ米十七石五斗 永七貫文

一高百石四ツと云ハ米廿石 永八貫文 一高百石四ツ五分と云ハ米廿二石五斗 永九貫文

一高百石五ツと云ハ米廿五石 永十貫文

右と田畑六分違二石五斗替厘付田畑寺分の起り也此厘付の法と以て田畑多少の地米金多少有とも同厘と有ハ助成過不足なき様と考ふる

根元あり

一高六百十八石七斗五升 村

此取水三百九石三斗七升五合 但し高は五ツ

内 百五十四石六斗八升七合五勺 畑方但し二石五斗替 永六十一貫八百七十五文

右を高取米永有る時厘付と見る法也○術は日取永六十一貫八百七十五文へ六分違ひの法一五と練りて九十二石八斗一升二合五勺と成是へ有米百五十四石六斗八升七合五勺を加へ二百四十七石五斗と成是と厘付の法入りて除を三百九石三斗七升五合と成と高とを除し厘付五ツと知る也但し高百石と竹米廿五石永十貫文と當る田畑多少并は皆畑とも同意と知るべし

○厘付の法八の起りの事



一 厘付の法は八を用ゆるに二割半の法あり実は一と置一二半りと除し  
 八と得る此八の法を用ゆるに仮令へば田畑高百石の取米二石五斗五  
 ツ成よりして五十石と成田畑取分よりして田畑共取廿五石宛也然るに  
 田畑六分違の法あるゆへ一五の法を用ひて畑米を減じ米十五石と成  
 之は田取を加へ四十石也田畑取米五十石の内より減じ残り十石を實  
 置右の四十石より除し二割半と知る外二割依て是より一を加へ二  
 五と法として実より一と立除して八と得此八と法として用ゆる也高厘  
 付と見るに畑永へ二石五斗と兼じ米は直し高りと除し厘と成也此故  
 り右田取廿五石へ畑取の十五石を加へ八りと除し田畑取米五十石と  
 成之と高りと除し厘付と得る也但し之は二石五斗替五ツ成の法也  
 ○廿貫百石と云事并永の四割替高の二割替と云事

一 廿貫百石と云ハ高と結ぶ法よりして永の四割替高の二割替も同意也  
 一 永廿貫文の地 村 此取五十石 但し二石五斗替  
   内 十貫文の地を 田方此取廿五石  
       十貫文の地を 畑方此取廿五石 但し右同  
 一 高百石 右廿貫文の地 右村 此取米五十石  
   高五十石 右十貫文の地 田方 此取米廿五石 高は五ツ  
   高五十石 畑方 此取永十貫文 高は五ツ  
   此取米廿五石 二石五斗替  
 右を高く結ぶ法よりして田畑六分違の根元也但し此法と以て執行する  
 時ハ田畑等分の地を云ふ及ぶに田勝畑勝又ハ田斗替畑の地山野海川  
 或ハ米金多少の地ありとも同高同厘とありは過不足ありとふし是也



高は五ツ成の法也

一 永の四割替と云ハ廿貫百石田畑五ツ成より起る也○術は曰取米五十石と高永廿貫又より附し二石五斗と得又高百石と四歸しても同意也

一 高の二割替と云ハ永廿貫を以て高百石と對する謂也廿貫と法とし廿貫と除し高百石と得る永を何程も右の法より除し高は結ぶあり

今よ永高の村有て取箇厘付と見るハ右の意を以て知るべし之と高の五石替とも云高百石と五石より除し廿貫又と得る也前記と如く

上方三分一銀納奥州の六石代七石代ハの法とつへども関東二石五斗代の法を以て考ふる時ハ分明は知る也但し其内上方と仙臺ハ一倍違と古来より云傳ふ又関東ハ上方より二割劣あり此外國々の法色と有とも廿貫百石の法より考ふる時を分明あるべしと云ふ

○上方厘付三分一銀納の事

一 上方の厘付関東は同じ但し関東の二石五斗替ハ則ち一石五斗替も成上方三分一銀納一石は四十八匁替ハ兩は一石二斗五升の直段も成也此の如き差引と勘弁有るハ國々所々厘附田畑同厘と云ハ過不足なし

一 上方三分一銀納を関東は半石半永二石五斗替の意也其外甲州三分一小切納又大切納と云奥羽は有六石代七石代など何れも同じ心得也

一 上方ハを以て銀遣ひ成ゆへ銀納也又公納銀の定直段ハ金一兩は六十匁替也古来を町相場六十匁より安きより下直段銀を以て高直段成相場を納めし故百姓大に潤ひしと也今ハ通用銀六十匁の内へ引込又付為よりなる由元来右の心を以て三分一銀納は定めたる成べし

一 上方とも物成の仕出しを廿貫百石より積り起せし也上方三分一銀



納の法有より畑の仮取米廿五石と三割其一を實とし残り二ツ法  
として除をれば五分と成之を元来の廿五石へ乗じ十二石五斗と減じ  
畑高五十石を永十貫文の地あり是を廿貫然る時ハ右十貫文を以て十  
二石五斗と對するより永一貫文又一石二斗五升と當る永一貫文ハ  
金一兩と通用を依り寄一兩の相場より的當田を算るあり

○上方銀納直段并關東直段二割高の事

一上方三分一直段一石又付四十八匁替と云法ハ右記を通りの畑取定  
直段一石二斗五升より起る也術は曰公納銀相場六十匁を實置右畑  
取定直段を法より除をれば一石又付四十八匁と知る之を定直段と  
一上方の地を關東より二割能は付畑方も直段二割高し術は曰上方直段  
一石二斗五升と法より關東の二石五斗と除を二割高と知る上方と

關東とい斗代盛を見るは此心を用る也然るは上方の盛十五をれば關  
東ハ十三として餘後あるは關東より十五の盛をば上方の二割増  
を斗代盛の内へ考へ入ると見えたり又石盛と考ふるは上方關東も  
同然より田畑六分違と知るべし四十石を五ツ成と考へ五ツを以て結  
ぶと中分ふりと心得べし仮令惡地あり共右の如しと知べし若し山方  
ふより高は五ツ成とも考ふる地を永くを積り石高を結ぶ委の本文  
は有取箇免相を盛次第と心得定免と考へ猶以て盛を專一は心得べ  
し又高を盛る心同然也又年々見取と考へ年々の出来次第と心得べ  
し然る共畑方を盛と以て考ふるは肝要也

○上方關東互取釣合の事

一上方關東共石盛根取の仕出し法同様也又田畑六分違と云とも上方



関東同意也上方三分一銀納を関東二石五斗替の意一石四十八匁の定直段を関東二石五斗替は二割増の積り也右反取釣合左の通り也

上田十二の盛反取四斗 中田十の盛反取四斗 下田八の盛反取三斗五升

上畑六の盛反取四斗 但し中田と同じ 中畑下畑を二ツ下りの段と同じ

此永百六十匁 但し二石五斗替

田方同断上畑六の盛反取四斗

此永百九十二匁 但し一石又付定直段四十八匁替

右上方の反取二斗四升ハ関東上畑の反取四斗又釣合也術は日上方上畑の反取二斗四升へ定直段の四十八匁を乗じ十一匁五分二厘と成る公納銀相場六十匁を除し反取永百九十二匁を得る是関東二割高の永あり中畑下畑は術同断也又右反取永と一二つを除し関東の反取

と成る此減永百六十匁是上方反取と二割減じたる永也又関東銀相場六十匁へ八と乗じて四十八匁と成是上方公納銀相場也高直成方と上方銀直段は用は是を何せり関東より二割高と知べし

一右上方関東二割高の謂を以て関東反取四斗と上方反取二斗四升と釣合と知るべし

一又日関東銀六十匁を上方銀四十八匁を除し上方定直段一石二斗五升を得る是関東二石五斗替二割高也又右一石二斗五升へ二割と乗じて二石五斗と成

一石盛りを畑方の根取を知るを仮令へど上畑を見らるが中田の盛へ六分違の六と乗じ六ツと成へ四分六分の四と乗じ上畑の夜米二石四斗と成是へ上方あるば四十八匁と乗じ六十匁を除し根取永百九



十二文と得又曰上方の反取米と見ると、関東中田の石盛へ二四と乗  
 して直二斗四升と得る是ハ六分違の六分と四分六分の四と乗した  
 る早算なり又関東の根取米と知ると反取米と二石五斗を除去し  
 一石反取米を以て石盛と知ると上方の反取米へ六十文と乗し定直段  
 四十八文を除去し二斗四升の反取米と得る之と四分六分の四と除  
 し石盛六ツと成也関東ハ上畑反取米百六十文は二石五斗と乗し四斗  
 と成と四分六分の四と除し石盛十と得る又之へ田畑六分違の六と  
 乗し石盛六ツと得る也

○永の四割替高の二割替高の五石替再談

一貫高と石高直をよと買高と廿貫文を除去し石高と得る  
 一石高と永高直をよと廿貫文と乗をべし但し廿貫百石の謂あり  
 高の二割ぶくと云

一貫高を以て元取米と知るとハ貫高と四飯をべし但し百石五ツ成の謂あり  
 一元取米を貫高と知ると四と乗をべし  
 一石高を元取米と見ると高を二飯をべし但し高の二割替あり  
 一元取米と高を見ると五飯をべし但し高五石替  
 五ツ成は當る

○田畑六分違厘付反取心得の事

永高五貫六百廿五文  
 分米廿八石一斗二升五合  
 一上田二町八反一畝七分半 此取十四石六分二合五勺 高は五ツ  
 此米十一石二斗五升  
 術は曰永高を二飯を分米高と得ると石盛を除去し反別を得る分米  
 は定厘五ツと乗し五分の米と成也又斗代を積るとハ五分の米  
 取ると反取に至ると四公六民は取る也之は依て石盛へ四と乗し反  
 は四斗取と成又反別へ乗しとら反取米と得る也中下も之は同じ



永高一貫八百七十五文  
分米九石三斗七升五合

一 上田一町九反五畝九分 石盛四ツ八分

此取四石六斗八升七合五勺 高五ツ 及百廿八文取

術前ジツマス同し但し石盛ハ四と兼レ取米と得ル又六分違の法一五と以テ除シ反永と得ル中下之准ズ

○山野海川高結法の事

一 野錢野米山錢山手米其外海川ハ高ム結ム前ノ記セ野付の法カ考ヘ田畑等分の心と以テ結ム皆五ツ成を元ニ立米永トり盛出を也又米と高ム結ム米一石を高二石と是高ム五ツ成の積リ也又永を一貫文と高五石を積ム是と高の五石替と云フ此レ又五術ニ云フ永一貫文替ニ二石五斗と兼レ免五ツを除シ高五石を成右を何も野高

と云フ又真菰高段高ム云フ亦野高と名也取ハ定免五ツ取也又漆桑楮等ハ三尺廻リ一束を分米一升と定一束永二文と極ル皆五ツ取の定法也國ニ寄漆畑楮畑の検見ハ心得と之と同シ也是と上木年貢と云

○浮後小物成臨時の事

一 浮後ハ海川魚漢ハ其外運上物の類と云フ小物成ハ野野山錢野手米山手米ハ都テ正税ニ准ズ云フ但し知行渡の時小物成ハ高ム結ム運上物ハ高ム結ム又何も賣出物出目米口米の類ハ臨時物と云フ此外不時ハ掛ル皆臨時物と云フ又六尺給米ハ傳馬宿入用也蔵前入用ハ是亦臨時物也

○高の五石替考の事



古来永一貫文と高五石は極ると考ふる今以て相州鎌倉中二永高の  
村なり地坪千坪を以て永一貫文は當ると云傳ふ是を以て見る時ハ永  
一貫文五石替は極ると見えたり右千坪を田法三つを除し三反三畝三  
歩三三と成是へ十五の盛を乗し高五石と成し一坪一升毛五合五分取は  
五ツ成の謂也○右十五の盛を未だ術は曰永一貫文へ高五石を乗しと  
右の三反三畝三三三を以て除し十五の盛を得る也

○山方一毛作の場所高は結ぶ勘辨の事

一山方ふとて畑斗有てあるも一毛作の山畑を物成は少く反別斗り  
多き地を斗代とて高は結び難し是ハの処ハ貫積りの法を用て然る  
るも也尤も反別ハ其土地の善悪よりて反石盛を以て仕出さるべし右  
石盛を仕出さ法此の如くあれども之を基と立る道よりて強ち都て之

を用ゆるよりて都ての事本正しうは未治より物と計ると  
見當りてを空へ矢を誤つ如くして空也依て此法を立るとも也十五  
の盛五ツ成ハ一坪一升毛より始り一坪一升毛とつへ僅々あれ共此  
法と元として幾百萬の高も計るべし然を一と萬物の始よりて進む時  
を無量に至る天敷りとを大極美数とてハ天元の一也依て古人之を以  
て作為ると見えたり凡そ石盛を極るとを心と以て第一とし勘辨の  
二字を緊要とて其内檢地石盛を百姓永代の浮沈安危の極る処あれを  
屹度心とせしむを忽せざるべし古人と都て事は猶豫あるより  
変災有時も百姓の痛少し物も緩とふき時と物事迫る故も小要とつへ  
共百姓の難儀甚しし或ハ離散し又ハ退轉し及ぶ者多し反令務めを止  
るとつへ共百姓疲勞する時と耕作勢ひあく肥足とて自然護実らば



上下損失と成然を石盛と極るを先其土地の善惡其外要用の正を委  
 考へ備近郷近村の土性石盛及取を考味し其村へ引合せ勘辨する  
 肝要也又前々高入の村を檢地せど前々の石盛土地お應う不相應う  
 地面土性其外微細を考へ或ハ前々の取箇平均を見届地面の甲乙を引  
 競べ當時困窮の輕重を何故と考ると第一也古法の定めり田畑五ツ  
 當る所の考あれ共畑多き村とて定厘五ツは當ても實の厘付の少し  
 古法の旋は泥を只古法と的よく當時の勘辨第一也新は檢地して  
 石盛を極るに大切の事也中々容易の事なり  
 一取箇五分とて心得一升とて五分とて一合もとて五分と  
 こと心得るハ惡し尤も勘辨とれば十俵取の百姓ハ五俵納め一俵取の  
 百姓と半俵納るも五分とてあれ共十俵の内五俵作徳より百姓と一

俵の内半俵作徳より百姓とハ内証天地の差なり合毛多き処より  
 令ハ三割引なきと一割引五合以下ハ五割引べきと六七割引は出  
 来方宜く年貢多し納る百姓より下出来の方作徳不足より内証の勝  
 手足るもの也是第一の心得也然ハ心づる人を位合の引よ心を付  
 勘辨も五合摺よとせよ三合四合摺よとせよ也然も其當時と此風癆と  
 たり併し地方は関る者此心と忘るべし

○水早損干減方の事

- 一 二合トリ 干減 早損を二合
- 一 三合四五寸 水損ハ二合五寸の割を以て引べし
- 一 三合六七寸 同 一合五寸 同
- 一 四合四五寸 同 二合 同
- 一 四合六寸 同 一合 同
- 一 五合余寸 同 一合五寸 同
- 一 五合トリ 同 一合 同



○ 扱摺取分勘辨の事

一 二合より 早損 共々四合摺 取分 三分 公納  
 三合四五合より 水損 共々四合摺 取分 七分 百姓  
 一 三合六七合より 同 共々四合考摺取分 二分半 同  
 四合四五合より 同 共々四合考摺取分 六分半 同  
 一 五合より 同 共々五合摺 取分 四分 同  
 一 一升まで 同 共々五合摺 取分 四分 同  
 一 一升以上を五合摺より取分五分より但し一升の外五分の取分四  
 分加ふる也

東京 大月忠興 補訂

校正地方落穂集卷之二畢



